

【Part 2】災害文化とは～気づいて

東日本大震災後の三陸の災害文化に気づいた活動がつくる災害文化 「命を守る言葉」の授業を中心に

田中 成行
(岩手大学)

2011年の東日本大震災後、当時勤務していた東京学芸大学附属小金井中学校の生徒たちの中から何かできることを実践したいという声上がり、生徒会等の活動も始まった。

国語科としてできることを模索した中で、三学年の定番の古典教材の松尾芭蕉作である、『おくのほそ道』の発展教材の副教材として被災地である岩手県宮古市にある「姉吉の碑」の碑文を「命を守る言葉」として取り組むこととした。

『おくのほそ道』の中で芭蕉が東北の旅の途中に「壺の碑」の碑文を見て、涙ぐんで感動したのは、「自然も人も月日の中で変わってしまうのに、石に刻んだ文字は残り、それを書いた人の心は変わらず伝え続けられてゆく」ということであつた。

同じように、東北岩手県宮古市にある漁村である「姉吉地区」は明治と昭和の二度の大津波で全滅した尊い犠牲と教訓を生かし、「何とかして命を守りたい!」という願いを込めて昭和8年に「大津浪記念碑」が刻み付けられ、その教訓を生かして高所に移転していて、今回の大津波では全家屋が無事であった。その「姉吉の碑」の碑文の「作者の工夫」を、「命を守る言葉」の工夫として教材化した。

石碑には大きく分けて二種類ある。「あつた事実を詳しく記録して漢文等で残す」ものと「命を守るためにどうすべきかを呼びかける」ものとである。「姉吉の碑文」は后者であり、二度の全滅の悲劇があつた土地だからこそ、二度と犠牲を出さないための究極の方法を、碑文の文字で呼びかけていることに気づいた。他の地域の呼びかけと決定的な違いがあつた。それはまず「逃げろ」という呼びかけがないことである。

「津波から命を守る究極の方法とは何か?」「子どもや老人など「弱者」をも守る究極の方法とは?」それを伝える碑文の文字の工夫に注目すると、上段と下段で独自の工夫があつた。上段が詩的な表現である韻文であり、下段が説明的表現である散文である。

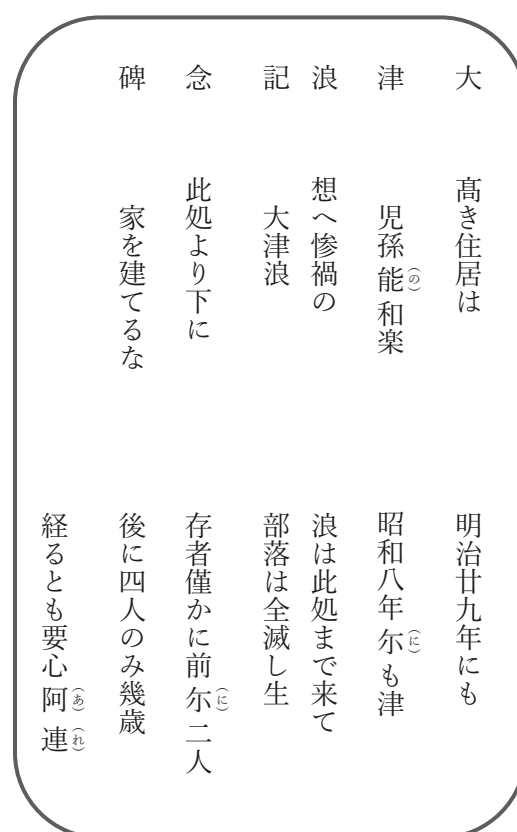


図1. 姉吉の碑

「弱者」である「逃げることも不自由な人々の命を守る」ための究極の方法は「高所移転」である。そのことを呼びかけ、心に刻み付けられるような覚えやすくする作者の工夫をまず「上段」から読み取ると、

- ・七五調である。七七七五・七七とあり七七七五調の^{どどいつちよう}都都逸調である。

都都逸とは江戸時代から流行した恋の流行歌謡であり、次の例のように明快で覚えやすい。

しんしゆしなの しん
 〰信州信濃の 新そばよりも わたしゃあんたの
 そば
 側がよい

江戸時代から流行し、昭和8年当時も流行歌謡として漁師町でも謡われた「^{どどいつぶし}都都逸節」や「^{むすめぎだゆうぶし}甚句」「娘義太夫節」とも重なる。釜石など今も相撲甚句が謡われ新作も生まれている。

- ・「^{すまい}高き住居は^{じそん}児孫の和楽」の、「児孫」とは「子」や「孫」の意味だが、さらには自分では逃げることのできない赤ちゃんや高齢者などの「弱者」をも表しているといえよう。そのような方々の命を守り、「和楽」「幸せな生活」を、反対の「惨禍」から守るためには、「高所移転」をして「高き住居」に住むことである、と宣言する。この言葉は田老地区など大きな港町では当時はなかなか主張が難しかったであろうが、二度も全滅した小さな漁村の「姉吉地区」だからこそ主張できた言葉といえよう。
- ・「^{おもえ}想へ惨禍の大津波」の「想へ」は、「倒置法」として「想い出せ」と呼びかけ、「何を？」と読み手に考えさせて、「あの悲惨だった大津浪の時の出来事を」と、かみしめさせる効果がある。同じ地域の石碑のほとんどが「想へ」なのだが、一箇所荒巻地区は「忘るな」とあり、その方が自然な表現とも考えられた。しかし、現地を訪ねてみて気づいた。そこは、「^{おもえ}旧重茂村」であった。つまり、「想い出せ、重茂村の悲惨だったあの大津浪のことを」という意味で、動詞の命令形の「^{おもえ}想へ」と、地名の「^{おもえ}重茂」が「掛詞」となっているのであった。
- ・「一字下げ」の文字で視覚的にもリズムを作り、「想へ」「建てるな」の命令形での切実な呼びかけの工夫など。

「下段」は、年号の「^{(二十)にじゅうく}明治 廿 九年」「昭和八年」や、生存者の「前に二人」「後に四人」のように具体的な情報を、数字を並べてわかりやすく説明し

ている。

国語の二つの要素である詩的な表現の韻文と説明的な表現の散文の特長をフルに発揮して「命を守る言葉」に結晶化している碑文といえよう。二度の全滅という悲劇があったからこそ「愛する人の命を守りたい」という究極に研ぎ澄まされた言葉が生まれたともいえよう。

では、この「姉吉の碑」の碑文の作者は誰であろうか。生き残った方々が刻み付けるのが自然であろうが、実際にこのような文章をまとめるのは容易ではあるまい。

そこで参考になるのが、山下文男氏の『津波と防災—三陸津波始末—』（古今書院、2008年）や、『君子未然に防ぐ—地震予知の先駆者今村明恒の生涯—』（東北大学出版、2002年）に紹介されている地震学者^{いまむらあきつね}今村明恒博士の存在である。50年以内に東京に大地震が起きる可能性があるから火災等に備えよと主張し、「法螺吹き」と批判されたが18年後の1923年関東大震災が起こり、地震の「神様」と呼ばれた。氏は「予言」ではなく震災の「予防」をしたかったのだが雑誌等では「予言」の方が注目され、被害を未然に防げず、その反省を生かして昭和8年（1933）の三陸大津波の後の高所移転の推進と朝日新聞の義援金による石碑の建立に深くかかわったとされる。今村博士は当時流行していた浄瑠璃の流派である義太夫節の娘義太夫の名人として人気を博した豊竹呂昇に師事しており、その芸能の言葉の工夫が生かされているとも考えられる。

つまり、直接の被災者ではなくても、その被災者の方々の心に寄り添い、今まで学んだ様々の国語の「言葉の工夫」を活用して、「自分事」として「命を守る言葉」を創ることができるということである。

東京学芸大学附属小金井中学校では「姉吉の碑文」の「作者の工夫」を「命を守る言葉」として学び、「私の碑文」を創作した。地震や津波に対するものだけでなく、世界の水や食糧事情への呼びかけや、いじめや自殺を防ぐ呼びかけから、身近な学校生活の部活での熱中症対策から、日頃自分を支えてくれる親友や両親への感謝、お弁当を

毎日作ってくれる母への感謝など、多様な「命を守る言葉」が生まれた。

2014年、岩手県宮古市の田老第一中学校の98名の生徒の皆さんに、「姉吉の碑」の「作者の工夫」を紹介し、「命を守る言葉～「私の碑をつくろう」^{いしふみ}」という授業を实践させて頂いた。筆者自身も「一人の作者」として

「愛する人を 守るためには 津波から 弱者も救う 高所住み 夜でも皆が逃げられる 道を作りて 共にかたろう」

と創ってみた。ご家族を亡くされた方も全員、先生方の親身なご指導に支えられて書き上げることができた。「地震があつたら 高いところへまず逃げろ 大切な人は避難所にいる そこで互いに助け合うべし」「親と決めとく 地震のときの にげ道と にげる場所 安心するな もっと上へ」「防浪堤 あつても逃げろ 高台へ 津波が来たら てんでんこ」や「変えていった 私たちの未来を 乗り越えた大きな試練を 伝えよう 私たちが 伝えよう」と実際の津波の被災の体験を生かした呼びかけや決意だけでなく、日常生活に戻る中で「昼下がり 海へ行こうとチャリをこぎ 一人で行った桧内漁港 惨事を忘れる美しさ 海も空も包み込む／自分は海があるから失うものもあるが、海があるから得るものもあると思った」と韻文と散文で命の源の故郷の海を見つめ直す作品や、「気付いてる？人が傷つく その言葉」という日常の言葉のいじめや「カキン エラーはだめだ エラーしたくない その考え マイナス思考が マイナー思考だ」という部活への真剣な取り組みの言葉も生まれた。これらの作品を読んだ東京の中学生達は、自分達には被災地の方々の大変さはわかりきれない、という不安を訴える意見も出てきた。しかし、野球をやる生徒が「地震がきても 津波がきても 大事なものを 無くしても 甲子園への 大きな夢は そこにある」と、共通の夢を見出して呼びかけ共感された。入間市に住む生徒は「ウロウロしているまに 大被害 黒波見えぬと 気をぬくな 守れ 自分の

命・自分の町 小さな備えが みなを救う」と「いるま」の掛詞を使い、被災地でなくても備えの大切さを呼びかけた。被災地の生徒さんとの交流と対話が、その心に互いに寄り添うことにより「自分事」として実感し合い本気で創作し合う機会を生み出すことができたと言えよう。

岩手大学においては、2020年8月、コロナ禍の中で、入学式もなく、8月まで遠隔の授業でキャンパスにも来ないで、8月まで対面の授業もなかった基礎ゼミの1年生21名が「姉吉の碑文」の「作者の工夫」を生かして「命を守る言葉」として「コロナ禍碑文」を創った。まず全員がコロナ禍の気になるニュースと自分の考えを画面を通して発表し合い意見を交流し合った後、作った作品を発表し合った。筆者がまず「コロナかに 恋しいからと 逢うのでなく 大切なとき 愛するからこそ 逢わないで いのちをまもり 恋を愛に育てる 人でありたい」と創ったが、学生達は「コロナで気づいた 日々の幸せ 自分の行動 改めろ 少しの我慢が 誰かを救い 少しのきもちが 未来を変える」「シンシな心は 事態の収束 図れこの先 コロナ渦^{うず}己を守り 誰かを救え」「コロナ禍で 自分を失う ことなかれ」「誰もがこのようになると想像していなかったデマはウイルスの感染のようにすさまじい早さで広がった 世界中が混沌 町中が閑散 いつもと違った生活 みんなする検索 暗い世界を明るくするのは人々の希望 絶望を希望に変え、生きていこう」などと動画を創ったり、ラップ調で歌ったりと、工夫を凝らし個性を発揮して、日々の生活を見直し、前向きに希望をもって生きる意志を伝え合うことができた。

筆者自身コロナ禍の中、直接面会できぬまま5月と9月に老父母を亡くしたが、希望をもって生きる生き方を学生達の言葉から教えられた。「命を守る言葉」「命を育む言葉」をさらに共に追究してゆきたい。

(岩手大学)